

穂高連峰の縦走登山（2008年7月18日～21日）

「7月末の連休に穂高周辺に入りませんか」との和田さんの提案に、「日程だけは空けておくよ」と笹川さんと私が同意したものの、肝心の山行ルートがなかなか決まらなかった。従来は和田案にお任せであったが、山行を重ねるうちに色々注文が出るようになる。最初は、岳沢から前穂高と奥穂高周辺の山行の提案が、ロープウェイで西穂高山荘に上がれば奥穂高までのルートがとれるのでないか、いや我々の忘れた技術と体力では時間的にも難しい、ならば奥穂高から西穂高に下るコースであれば時間的には楽になるのではないかと、このルートは北アルプスでも最難関の縦走路とされ不用意に入ってはならないとされている、難しいとは言ってもペンキマークに従って縦走するのであって本格的な岩登りをやるわけではない等々、いく度かのメールのやり取りで決まったのが今回の山行である（図1）。結果的に、この計画を強く希望した青景が責任をもってリーダーをやれということになった。天候や体調が不調の場合は奥穂高一西穂高の縦走は諦め、涸沢あるいは天狗の科尔から岳沢に下山する計画とし、装備には、ヘルメット、ピッケル、ザイル、スリング、カラビナ、ツェルト等を追加した。

メンバー：L 青景平昌（写真・記録）、SL 和田穰二、SL 笹川雅史

日 程：2008年7月19日 上高地—岳沢—前穂高岳—奥穂高岳—穂高山荘

7月20日 穂高山荘—奥穂高岳—西穂高岳—西穂高山荘

7月21日 西穂高山荘—上高地

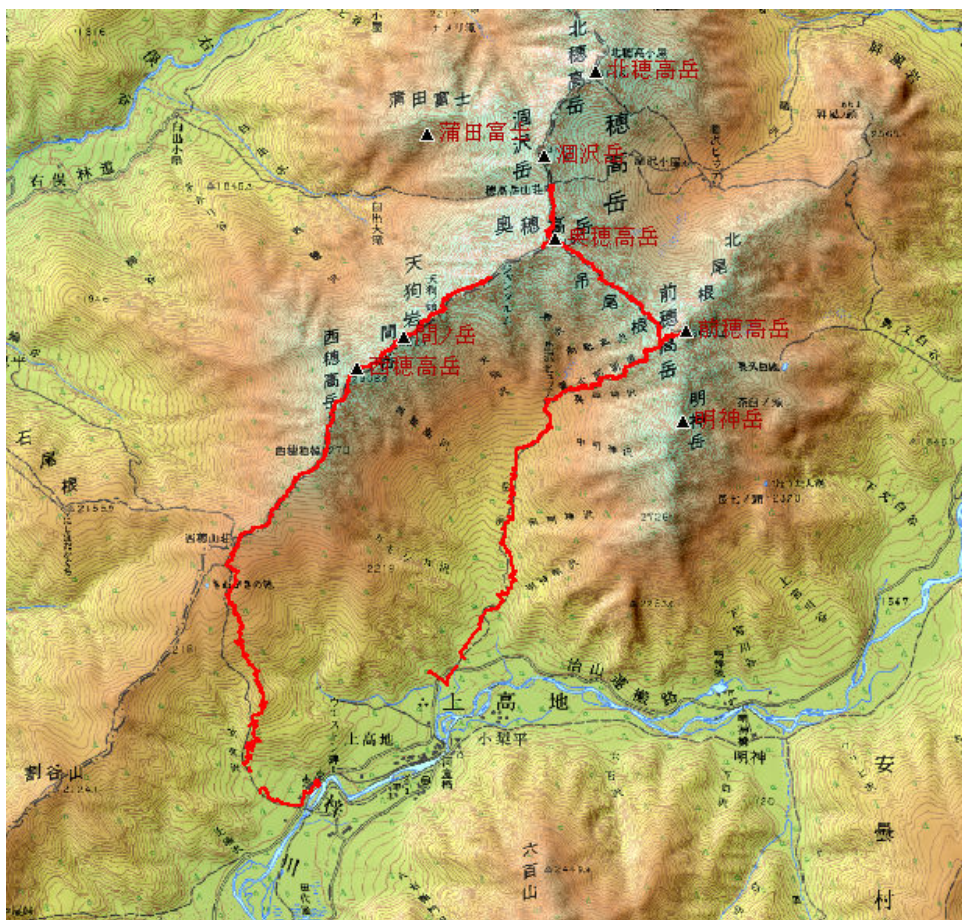


図1 GPSトレース図（和田作成）

7月18日（金）晴れ

22時八王子南口に集合し、青景車で沢渡駐車場に向う。高速道路の深夜割引を使って1時45分に沢渡駐車着。すぐに仮眠体勢にはいる。

7月19日（土）快晴

シャトルバスにて沢渡駐車場発（5：05）—上高地バスセンター（5：35—55）—河童橋（6：05）—岳沢ヒュッテ跡（8：10）—紀美子平（11：55—12：10）—前穂高（12：55）—紀美子平（13：40—50）—奥穂高（16：40—50）—穂高山荘（17：30）

沢渡駐車場脇の芝生の上でシュラフカバーに入っていたが、4時過ぎには寒さで目が覚めてしまった。天気は上々のようである。続々車が到着するなかで出発の準備を始め、始発の上高地バスセンター行きに乗り込む。

バス移動の沢渡—上高地間は、昭和44年の春合宿の下山にバス停のある沢渡まで上高地から歩いたルートだと当時のリーダーだった和田さんから聞かされたが、その合宿には私も新穂高温泉から入山し双六で合流した筈なのにすっかり忘れてしまっていた。

到着した上高地バスセンターは、すでに長距離バスで乗り込んだ登山者で大混雑していた。特にトイレの入り口には長い行列が出来ていた。上高地の最新情報に詳しい笹川さんをトップにして梓川の清流沿いに河童橋に向う。

河童橋からは、これから向う岳沢越しに穂高連峰の稜線が望められ（写真1）、振り向けば梓川の流れの先に焼岳が朝日を浴びていた（写真2）。

河童橋を渡って岳沢に入り、笹川さんの無謀と思える快調なペースにリードされて樹林帯を進む。岳沢ヒュッテ跡には地図の標準タイムで着くことができた。岳沢ヒュッテは現在営業休止状態のままで、その跡は城壁のように積み上げられた石垣が残っているだけである（写真3）。ここからは天狗沢の雪渓がコルまで続いているのが見え、今年は沢上部まで残雪が多いとの情報通りに思えた（写真4）。



写真1 河童橋から望む穂高の稜線



写真2 河童橋から望む焼岳



写真3 岳沢ヒュッテの跡



写真4 天狗沢の雪渓



写真5 重太郎新道の急登

ここから重太郎新道経由で紀美子平に向う。北アルプス屈指の急登とされ、途中にハシゴや鎖が用意されているが、「カモシカの立場」「岳沢パノラマ」とペンキで書かれた展望台で岳沢周辺の景色を堪能することが出来る。写真5は、紀美子平への急登に喘ぐ笹川、和田兩名である。写真6は展望台から覗き込んだ箱庭のような上高地の鳥瞰写真で、登山口の河童橋やバスセンターも見える。また、西穂高側の稜線には明日の縦走路となる天狗のコール―天狗岳―間ノ岳―西穂高のスカイラインが見てとれる（写真7）。



写真6 重太郎新道からの上高地



写真7 西穂高岳から天狗のコールのスカイライン

案の定、この急登で我が還暦隊のピッチは急激に低下し、後続隊には進んで道を譲り、一方、上からはハングル語で挨拶してくる 30 名程度の大パーティに道を譲られて元気そうに歩くことを強いられるなど、厳しい登高となった。最後の鎖場を回り込んで岩を乗り越すと目の前に紀美子平の道標があった（写真8）。



写真8 紀美子平と明神岳のピーク



写真9 43年振りの前穂高岳

紀美子平からは空身で前穂高を往復した。前穂高は昭和40年の夏合宿以来であるから実に43年振りであるが、残念ながら当時のことは何も思い出せない。頂上では槍穂の稜線をバックに記念撮影し、改めて記憶を更新した。（写真9）

紀美子平からの奥穂高に向かう吊り尾根の登りは、疲れ切った重い足を引きずりながら、途中、涸沢ヒュッテを覗き込めるコルでは雪渓から吹き上げてくる冷風が気持ちいいとか（写真10）、前穂から伸びる北尾根が綺麗だと見入るなど（写真11）、適当に口実をつけて休みながらやっとのことで奥穂高に辿り着いた。

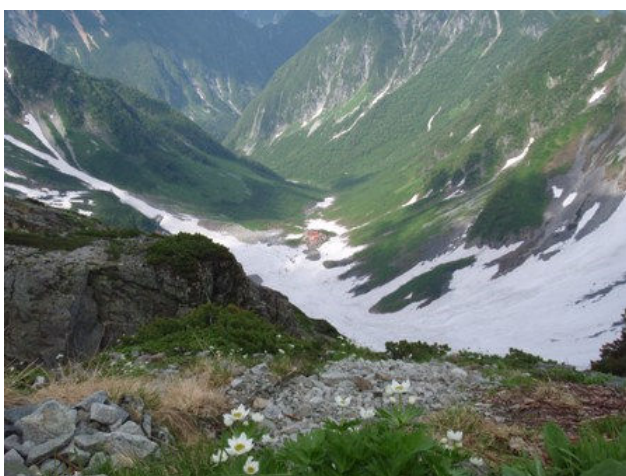


写真10 吊り尾根から望む涸沢ヒュッテ

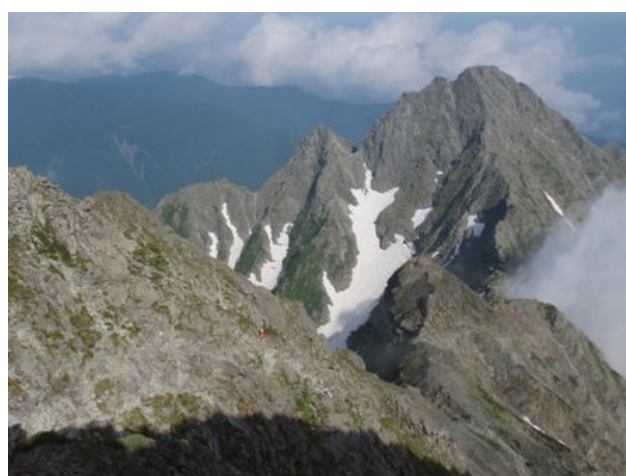


写真11 吊り尾根から望む前穂高と北尾根

奥穂高の頂上には小さな祠と展望案内盤のある二つの小さなピークがあり、ここから西穂高岳への岩稜が始まっている（写真 12）。 明日縦走する予定のジャンダルムへ向かう岩稜がぞっとするほど魅惑的であった。（写真 13）



写真 12 奥穂高岳の頂上にて



写真 13 西穂高への岩稜とジャンダルム

穂高山荘への下りでは、ガスの合間から、北穂高の南峰やドーム、涸沢岳などが見てとれる（写真 14）。昭和 47 年の夏合宿に滝谷の岩登りをやった所だ。最後の垂直な鎖場の下に宿泊予定の穂高山荘があった（写真 15）。山荘前の広場では、ここでもハングル語が飛び交うグループが元気で賑やかだった。宿泊手続きをすると、すぐに夕食を食べるように言われた。まだ、汗も引いてない状態での慌しい夕食を無理やり押し込んだ。部屋は「イワカガミ」で 2 段ベッドの 2 階隅をあてがわれた。一泊二食で 8400 円であった。明日は予定通り西穂高に向かうことを確認し朝食は弁当にしてもらって、早々に横になった。



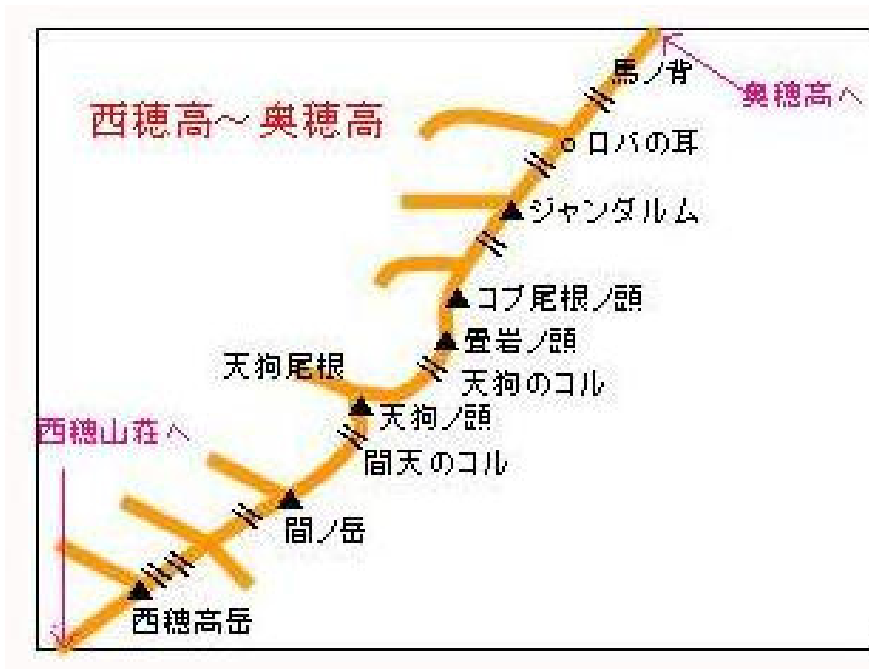
写真 14 奥穂高から白出のコルへ下り



写真 15 鎖場下の穂高山荘

7月20日(日) ガス、雨、曇り

穂高山荘(4:45) — 奥穂高(5:40) — ジャンダルム頂上(7:25) — 天狗のコル(9:00) — 天狗の頭(9:50-10:05) — 間ノ岳(11:05) — 西穂高(12:55-13:15) — ピラミッドピーク(14:15) — 西穂独標(14:50) — 西穂高山荘(16:15)



4時起床。すでに玄関では早発ちの幾つかのパーティーが準備を始めていた。天候はガスで視界は悪いが、予定通り朝食弁当を受け取って出発する。途中から小雨が混じるので、奥穂高の頂上で雨具を着ける。ガスのなか最初の関門である馬の背に向けて出発する。馬の背の下りは、岳沢側と飛騨側が切れ落ちたナイフリッジで有名であるが、ガスのお蔭で谷底まで視界が届かず刺激は半減といったところであった(写真16)。ナイフリッジを通過しながら、笹川さんは43年前にこれを跨いだことを思い出していた。3点支持で慎重に下る。



写真16 馬の背のナイフリッジ

馬の背の通過でほっとしたのか空腹を覚えて、次のピークであるロバの耳の基部で朝食をとる。後続の単独の青年が初めて抜いていった。ロバの耳、ジャンダルムとピークは踏むもが残念ながら視界は悪い。写真 17 は、途中で荷物をデポして空身で登ったジャンダルムのピークでの写真である。笹川さんが持っているのは、頂上に置いてある「ジャンダルム」と書いた木製の道標である。



写真 17 ジャンダルムにて



写真 18 畳岩の頭からの下り

ジャンダルムからは、コブ尾根の頭、畳岩の頭を經由して、ガスの中ペンキマークを見失わないように注意して天狗のコルに向かう（写真 18）。天狗のコルは、岳沢ヒュッテへの分岐点で避難小屋があったところである（写真 19）。天狗沢の残雪は避難小屋跡のところまで残っており、天狗沢をエスケープルートにするにはアイゼン、ピッケルは必要であった。天狗のコルから天狗岳への取っ付きは、垂直な鎖場の登りである（写真 20）。



写真 19 天狗のコル



写真 20 天狗岳へのコルの取付きの鎖場

天狗岳への登りはガレ場の道で、ペンキマークを忠実にたどる（写真 21）。天狗岳の頂上まで着て、薄日が射し始めてガスの中から岩稜を垣間見ることができるよう天候回復の兆しがみえてきた。ここには、西穂高山荘を4時に発ったという2パーティが休憩中であつた。ここで雨具を脱ぎ、記念写真を撮ってもらつた（写真 22）。



写真 21 天狗岳への登り



天狗岳からの下りは、ルンゼや逆層のスラブがあり、連続した鎖場である（写真 23）。逆層スラブを降り切った所が、天狗岳と間ノ岳との鞍部で、「間天のコル」である。間ノ岳の登りもガレ場で、ちょっと油断をすると落石を誘発する（写真 24）。間ノ岳の頂上には、積み重なった岩の表面にペンキで「間ノ岳」と書いてあるだけであつた（写真 25）。



写真 23 天狗岳からの逆層の下り



写真 24 間ノ岳への登り



写真 25 間ノ岳の頂上

間ノ岳から西穂高の稜線も節理の多い岩稜となっており、西穂高までに幾つかの小さなピークを辿ることになる。ガスの合間に、西穂高の頂上に人を確認するところまで来た（写真 26、写真 27）。

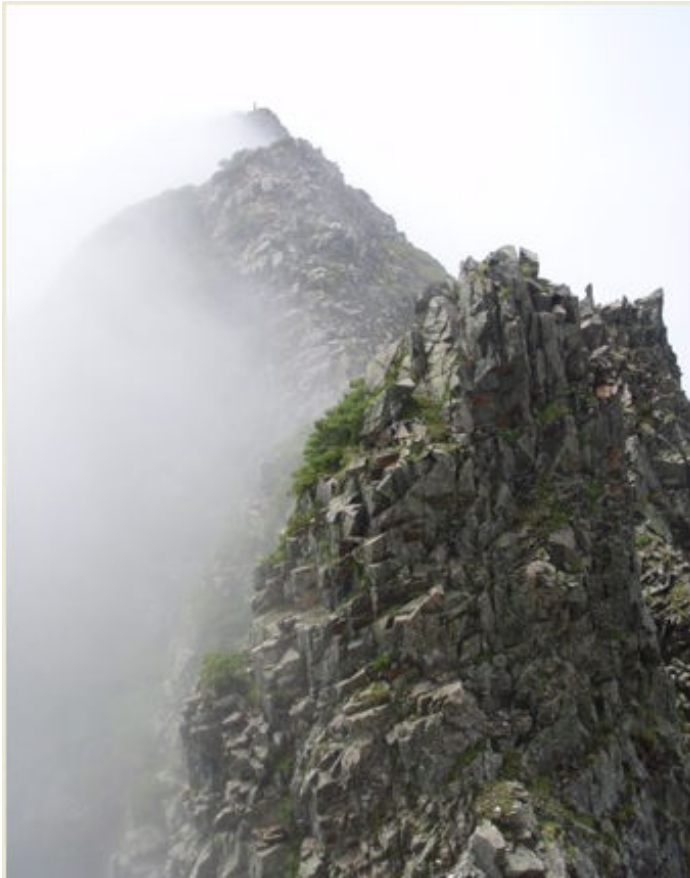


写真 26 間ノ岳側から西穂高を望む



写真 27 西穂高岳のピーク

西穂高の最後の登りも垂直な鎖場だった（写真 28）。西穂高の頂上には、西穂高山荘からの登山者が数人休憩していた。緊張を強いる厳しい岩稜の縦走はここまでだ。無事に辿り着けてよかった。思わず握手を交わす（写真 29）



写真 28 西穂高岳への最後の登り



写真 29 西穂高岳の頂上

辿った岩稜を振り返れば、ガスの合間に、天狗岳や間ノ岳に至るリッジが見えた。よくもあんな所を通過したものだと感心した（写真 30）。

西穂高岳からはのんびりした山道かと思いきや、途中にピラミッドピークを挟んで、ガレの痩せ尾根が西穂高岳独標まで続いていた（写真 31、32）。



写真 30 西穂高岳から天狗岳への岩稜



写真 31 ピラミッドピーク

西穂高岳独標のピークには、岩陰にぽつんと女性が一人うずくまっていた。西穂高岳に向った連れの帰りをかなり長い時間待っているようであった。最後のピークでほっとした瞬間を彼女に撮ってもらった（写真 33）。

ここからは、ハイマツの中を伸びる二人で並んで歩ける広い下り道を、最後尾を来る笹川さんの筋肉痛に呻く声を聞きながら西穂高山荘に向った。広島では来年3月に西穂高に登ってスキーとアイゼンワークを楽しむ山行を計画している由。この広い尾根での山スキーは面白そうである。

宿泊した西穂高山荘では、我々が最後のチェックインであったが、幸いにも3人で一部屋を独占することができた。一泊2食で9000円であったが、蒸し暑くて、風通しの良い廊下や玄関先で寝ている人もいた。



写真 32 独標への最後の登り



写真 33 西穂高岳独標にて

7月21日（月） ガス、後 快晴

西穂高山荘（4：40）—上高地登山口（7：15）—梓川河畔にて朝食（7：20—45）—河童橋（8：10）
—上高地バスセンター（8：20）—沢渡駐車場—乗鞍高原温泉—八王子南口

今日は上高地までの短いコースなのでゆっくり発るところだが、4時には目が覚めてしまったので早発ちすることにした。朝日を浴びる樹林帯を小鳥の寝覚めのさえざり聞きながら下山した(写真34)。上高地の西穂高岳登山口は立派な門構えであった(写真35)。これは焼岳の登山口も兼ねている。河童橋の上からは、3日間で歩いた稜線のピークやコルをなぞりながら確認することができた(写真36)。



写真34 西穂高山荘から上高地に下る



写真35 上高地の西穂高岳登山口

「緊張の連続だったが、面白かったネ」の私の言葉に、「もう二度と行きたくない所だネ」が返ってきた。道はなくペンキマークを辿る縦走で緊張する箇所は度々あったが、慌てる場面はなく落ち着いたさすがの還暦隊であったと思う。帰京の途中、乗鞍高原温泉「湯けむり館」(700円)に立ち寄って汗を流した。

数日して、和田さんから「次は槍ヶ岳の北鎌尾根でもやりませんか」とのメールが入ってきた。

以上(記 青景)



写真36 河童橋から縦走した岩稜を望む